

没後 350 年 尾張藩祖に仕えた陳元賛の生涯と思想

李麗 (文学博士、名古屋大学大学院人文学研究科非常勤研究員、陳元賛研究会副会長、当学会員)

明朝末期の混乱を避けるため多くの明人が日本に渡来し、日中交流の懸け橋となった。そのうち、江戸時代初期に来日した中国人の著名人は三人挙げられる。水戸光圈の師として水戸学の基礎を築いた朱舜水、萬福寺を創建し禅宗の一つの黄檗宗を伝えた隠元禅師、それに尾張藩初代藩主徳川義直に仕え中国文化を伝えた陳元賛 (1587-1671, ちんげんぴん、ちんげんいん) である。1619年(元和5)に渡来した陳元賛は、多芸博識で、「元賛焼」という陶器の作り方や学問、書道、詩文、武術、建築など多方面にわたり近世日本における日中文化交流の先駆者でもあった。

陳元賛は 1626年(寛永3)に將軍家光に謁見し、詩を詠んだと記録にある。1634年(寛永11)に江戸尾張藩邸にて義直に謁見し、しばらく後に尾張に永住することとなった。1671年(寛文11)に亡くなり、尾張徳川家の菩提寺、建中寺に葬られた。

彼の代表的著作は、『老子』の注釈を考究した『老子経通考』である。『老子』は聖徳太子 (574-622) の頃に既に伝来しており、平安時代の『日本国見在書目録』(藤原佐世著)には、河上公注をはじめとする『老子』注の名が記されている。河上公注は、前漢頃、河のほとりに住む「河上公」と呼ばれる人が書いたとされる『老子』の注釈を指す。平安時代から鎌倉・室町時代にかけて主に読まれたのは河上公注である。

ところが、江戸初期に幕府の重臣林羅山が林希逸 (1193-1271) の『老子虞齋口義』に注目し、訓点をつけ頭書を加えて出版し、『老子』注釈書の中で林希逸の『老子』解釈が最も素晴らしいと称賛した。以降、林注が流行し、河上公注は刊行されなくなった。陳元賛は林希逸の口義を「凡庸の士であり、理学のおろかさではないか」と批判し、河上公注を基に『老子』の深い解釈を記して『老子経通考』を著した。〈老子の学が虚無を本源とする根拠は「天下の万物は有より生じ、有は無より生ずる」によるとする。「虚無は実理」というのは空理空論ではなく、真理であると主張した〉。

東京都港区の正山寺には「陳元賛先生之碑」(1955年建立)がある。名古屋市東区の建中寺には尾張徳川家第19代当主義親題額の「高節千古既白陳先生碑」(1913年建立)がある。名古屋では3年前に陳元賛研究会が発足し、建中寺敷地内の陳元賛碑の拓本を採取したり、日本に残されている陳元賛に関する資料を収集したりしてきた。中国訪問が可能になったら、日中友好の証として杭州の陳元賛記念館に拓本などの資料を寄贈する予定である。